

一 唯これ謙虚の二道

いつも清らかな心でありたい。そして清らかな生活が續けたい。心の清らかなほど、仕合な人はありませぬ。幸福といふことは、財産があるとか、位置が高いとか、家庭が甘く行つて居るとか、さういふ外的な境遇ではありませぬ。幾程財産を積んでみても、不仕合は心の内部から沸いて来る。位置が高い、家庭が善い、名望がある、そんな人達の心をも、不幸の鬼は食ひ破つて仕舞ひます。眞に幸福だと云はれる人は、獨り心の清らかな方であります。清らかでありたい、汚れないでありたい。而してそれは云何したらよいのであらう。

人の一生は、之を分ちて五期となすことが出来ると思ふ。この五期を甘く通過して行つた人が、眞實人間の成功者だと云はれる。女で云ふならば「幼兒が娘とつばみ嫁と咲き、嬢と萎れて婆々と散るなり」。オギアくの幼兒がピイくの娘となり、櫛笄の嫁となり、子供抱へた嬢となりて、孫の守する姑となる。茲に人生の花もあれば實もある譯。男でも其通り、幼年・少年・壯年・中年・老年と、段々年を重ねて来る。蠶は四遍まで皮を脱いで姿をかへるといふが、人間は五化ばけるのであります。

之を一學問勉強の上について申しましても、「學問をせねばならぬと十五年」。何でも學問をしなくては不可ない、早く學校へお出でなさい、なんて云はれてゐる間に、直き十五年位は經つ。それから少々慾が出て來ると、「學問はしたいものだ」と十五年」。學問は仕たいなくと云つて居る中に、復十五年たちますと、都合三十年になる。すると「學問は是非にしたいと十五年」。學問は何でも仕なければならぬが、如何したら宜からう、なんて云うて居る暇に、復十五年たちますと遂に四十五年になる。サア斯うなると、世帯の苦勞

やら、子供等の世話やら、いろいろの事に心配する様になるから、愈學問は出来なくなる。「學問はとても出来ぬと十五年」。最早六十といふ老人株になつて仕舞ふ。その段になつて、幾ら歎いても悔んでも追付かない、一生無學文盲で終らねばなりません。是等は豎に人生の渡り損ひであります。

豎に人間が五度變る。その變る五つのものを、横に一緒にしたのが家庭である。即ち家庭には、坊も居れば嬢も居る。娘も居れば息子も居る。嫁も居れば婿も居る。嬢も亭主も居れば、舅も姑も居るといつた有様に、五通りの男女が集まつて居ます。而して此等幾十通りの護謨球が、幾個か箱に詰められた様なもの、これが所謂家庭なのである。既に數個の護謨球が一の箱に詰められてある。其中の一個が膨らめば、その多くものは容積を縮められて、小さくなつて居なければならぬ。親爺がはびれば息子が小さくなつて居る。嬢が出婆婆れば亭主が縮んで居る。積極的の親爺の下に長く同棲して居る息子には、消極的なのが多い。此等の者が互に負て居れば、物凄ながらも未だ穩かだが、互に同時に自我を張り立て、義務だの權利だのと膨れ出したが最後、箱が張り裂ける如く、家庭は破れて潰れるの外はありません。臺所の方でガチャンと音がした。内儀さん大聲はりあげて、「お竹何を割らしやつたのぢや」。「ハイ香の物の鉢を取落して、大きに不調法を致しました」。「何ぢや鉢を割つた、其鉢がお前の二年や三年の給金で買へると思ひますか、先度も大事の茶碗を割つた、今日も亦鉢を割つたのか、さうく片端から割つて貰うては、此方の身代も半年と續きはせぬ」。姫御前ならぬ山の神の、あられもない柳眉を逆立てゝの喚きかた。「これく云何したものぢや、そなたは兎角仰山なものゝ云ひ様をする、世間體が悪い、チトたしなまつしやれ。すべて女と云ふものは、何事によらず、やさしく小さく取りなして云ふものぢ

や。俺が江戸から歸りがけに、三保の宿で朝立ちしなに、草鞋をはきながら、でも富士山は大きいものぢやと云ふたれば、宿屋の下女が云ふには、否々あの様に大きく見えましても、半分は雪でございませと。女はとかく斯様にやさしく云ひたいものぢや、そちらの様に假初にも仰山に云ふてはならぬ」と叱りましたれば、「その位のこととは私ぢやとて知つてをる」と、膨れかへる。處へ隣から挨拶に来る。「先程はお土産どうも有難うございませ、マア御機嫌のおうるはしい事、長の道中定めし御疲れもあらうと存じましたに、却つて能う肥えてお歸りなさいました」。云ひも終へぬに、内儀さん横あひから「いえくあの様に肥えて見えましても、あれは半分は垢でございませ」と、ぬからぬ顔にやりこめたさうな。

これでは堪つたものでない。老子と申す方は「敢て天下の先とならざるが故に、能く成器の長となる」と示されましたが、一家の長としては、功を他人に譲り、甘い物は皆先きに食はしてやると云ふ、雅量がなくては叶わぬ。すればその各が能くその本分を守つて、らしくく家が治まつて参ります。或時口が大變不平を訴へて、「己は毎日働いて食物を嚙んで、養を作り身を育てゝ行く、こんな大切な役目を持つて居るに、鼻は何だ、碌な仕事もせず、己より一段と上席を占めて居る、怪しからん」と云ひました。すると鼻も黙つては居らぬ、「餘り大きな事を云ふな、己は匂を嗅ぐのが役目だ、此は香水の香り、此は肴の焼ける匂ひ、此は蕪が煮える匂ひと、皆嗅ぎ分けるからこそ、貴様に怪我がないのだ。若し己がなかつたら、貴様がどんなものを食ふか解りはせぬ、大きなことを言ふな」と、やりこめて不圖上を見れば、目のやつ二つも上段に構へ込んで居る、それが氣に懸つてならない。「目は何も仕ない癖に、己より高い處に居て、剩へ贅澤にも戸を閉めて眠つて居やがる」

と、仰向いて罵り立つれば、「ナニ俺は俺で立派な働きをして居る、若し目
なかつたら東西も分らねば前後も分らぬ。横合から面を拵り倒されても、千
尋の崖に踏みかぶつても仕方があるまい。柱角にぶつかつて鼻でも挫いたら
云何する。俺が上に居るも無理はあるまい」と威張つて、チョイト上を見れ
ば、眉毛が悠然と上席に寝そべつて居る、癩に觸つてならぬ。「口や鼻や目は
相當に立派な働きをして居るに、眉は何だ、一番最上位を占めて居ながら、
甚だ無禮でないか」と云はれて。「成程私は別に働きてない、流るゝ汗を
堰きとめる位の事、甚だ申譯がない、それではお前の下に行かう」と、眉が
目の下へ着いた。處が眉が目の下については、一向顔の形をなさぬ。男か女
か化物か、晝間でさへギョツとする有様。實は何もしない様な眉が、顔全體
の配置を締め括つて呉れるので、人間様の面が出来上る。眉は實に隠れたる
功勞者であります。

眉は眞に謙遜な者である。この謙遜な眉によつて、顔全體の爭論も止んで
各その職に忠なるを得た。『從容録』に「眼耳鼻舌に各一能ありて眉毛上
にあり。士農工商各一務に歸す、拙者は常に閑なり」とありますが、この
拙者が實は謙讓の美德を發揮したものである。家庭は互に持ちつ持たれつ、
一人が横着すれば互が迷惑する。親も子も夫婦も兄弟も、すべてが謙虚の心
に住せねばならぬ。嫁さんが夕暮の臺所で洋燈の掃除をし、油を注がうと思
つたが小出がなかつたので、出しに行つた。そこへ齡寄つた姑さんが奥の
間から出て来て、過つてそれに躓き、ガチャンとばかりホヤも蓋も粉碎微塵。
油を出して居た嫁は走り來つて、姑の前に両手をつき、「妾の置所が悪うござ
いました、どこも御怪我はございませんか、どうも相済みませぬ」と詫入
る。姑は莞爾して「イヤ全く私が不注意からぢや、お前の悪いのではない謝

るに及ばぬ。「イヤそれでも妾が……」。「イヤ私が……」と互に詫合ツこ、果
てさうもないのを側で見居た婿どの。「それは兩方とも悪いのではない、
洋燈が腹を減らして物を得言はなかつたから、それでぢや」と仲裁したので、
一同大笑ひになつた。如何にも面白い家ではありませんか。慙うあつてこそ
一家は能く治まる。この謙虚の心は、「斯るものをお助け」といふ、如來の大
悲に頭の下つた信仰の人に出來るのであります。「家内中調子をそろへて大
笑ひ、これ天然の音樂の聲」とやら。茲に縦も横もそろふた、たつぷりの人
間が出來ます。謙虚の心は、いつも清らかなすがくしい心であります。